

〈原著論文〉

「豊かなクラブライフ」によるアウトカムとは何か：  
総合型地域スポーツクラブにおけるアウトカム項目の検討プロセス

関根正敏<sup>1)</sup>・天野和彦<sup>2)</sup>・石井十郎<sup>3)</sup>・  
今宿裕<sup>4)</sup>・岩月基洋<sup>5)</sup>・川邊保孝<sup>6)</sup>・  
木戸直美<sup>7)</sup>・菅谷美沙都<sup>8)</sup>・田原陽介<sup>9)</sup>・  
西村貴之<sup>10)</sup>・長谷川健司<sup>11)</sup>・松橋崇史<sup>12)</sup>・  
村田真一<sup>13)</sup>・作野誠一<sup>14)</sup>

An outcome indicator for comprehensive community sport clubs :  
Conceptualizing enrichment of sport club life

Masatoshi SEKINE<sup>1</sup> Kazuhiko AMANO<sup>2</sup> Juro ISHII<sup>3</sup>  
Hiroshi IMASHUKU<sup>4</sup> Motohiro IWATSUKI<sup>5</sup> Yasutaka KAWABE<sup>6</sup>  
Naomi KIDO<sup>7</sup> Misato SUGAYA<sup>8</sup> Yosuke TAHARA<sup>9</sup>  
Takayuki NISHIMURA<sup>10</sup> Kenji HASEGAWA<sup>11</sup> Takashi MATSUHASHI<sup>12</sup>  
Shinichi MURATA<sup>13</sup> Seichi SAKUNO<sup>14</sup>

Abstract

This study had two goals. First, we aimed to identify the components of the outcomes that members of comprehensive community sport clubs achieve through club life in order to collect basic data to create a “quality-of-club-life indicator.” We created outcome items through recordings of interviews with club members. Second, we aimed to describe the process in detail to confirm the validity and reproduction of the outcome items.

In designing the outcome items, we first examined the concept of “club life.” Next, we set seven hypothetical categories to classify the outcomes to be extracted. Subsequently, we collected data through interviews and questionnaire surveys of club members and selected the important items that had significant content related to “a rich club life” from the data. We then grouped items into categories with common meanings, referring to the hypothetical categories. In addition, in each hypothetical category, we grouped important items with common meanings into subcategories. Finally, to include all the outcomes that club members attained, we held a discussion to reorganize the subcategories. We also modified the hypothetical categories based on the composition of the subcategories that were reorganized. The categories of outcomes that

were eventually derived were “connection” (9 subcategories), “trust” (4 subcategories), “rules” (3 subcategories), “*ikigai*” (3 subcategories), “sport participation” (12 subcategories), and “learning” (3 subcategories). The categories are the primary outcome items and the subcategories are their secondary outcome items.

キーワード：総合型地域スポーツクラブ，経営評価，アウトカム指標，クラブライフ

Keyword : comprehensive community sport club, outcome indicator, club life

- 
- |   |   |
|---|---|
| 1) 作新学院大学経営学部<br>〒321-3295<br>栃木県宇都宮市竹下町908         | 1) Faculty of Business Administration, Sakushin Gakuin University<br>908 Takeshitamachi, Utsunomiya, Tochigi, 321-3295                      |
| 2) 東北学院大学教養学部<br>〒981-3193<br>宮城県仙台市泉区天神沢 2-1-1     | 2) Faculty of Liberal Arts, Tohoku Gakuin University<br>2-1-1 Tenzinzawa, Izumi, Sendai city, MIYAGHI                                       |
| 3) 帝京大学医療技術学部<br>〒192-0395<br>東京都八王子市大塚359          | 3) Faculty of Medical Technology, Teikyo University<br>359 Otsuka, Hchiouji-shi, Tokyo, 192-0395  |
| 4) 神奈川大学人間科学部<br>〒221-8686<br>神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 | 4) Faculty of Human Sciences, Kanagawa University<br>3-27-1 Rokkakubashi, Kanagawa-ku, Yokohama, Kanagawa,<br>221-8686                      |
| 5) 嘉悦大学ビジネス創造学部<br>〒187-0003<br>東京都小平市花小金井南町 2-8-4  | 5) Faculty of Business Innovation, Kaetsu University<br>2-8-4 Hanakoganeiminamicho, Kodaira, Tokyo, 187-0003                                |
| 6) 東海大学体育学部<br>〒259-1292<br>神奈川県平塚市北金目 4-1-1        | 6) Faculty of Physical Education, Tokai University<br>4-1-1 Kitakaname, Hiratsuka, Kanagawa, 259-1292                                       |
| 7) 上智大学短期大学部<br>〒257-0005<br>神奈川県秦野市上大槻山王台999       | 7) Sophia University Junior College Division<br>999 Kamiozuki Sannodai, Hadano City, Kanagawa, 257-0005                                     |
| 8) 作新学院大学経営学部<br>〒321-3295<br>栃木県宇都宮市竹下町908         | 8) Faculty of Business Administration, Sakushin Gakuin University<br>908 Takeshitamachi, Utsunomiya, Tochigi, 321-3295                      |
| 9) 環太平洋大学体育学部<br>〒709-0863<br>岡山市東区瀬戸町観音寺721番地      | 9) Faculty of Physical Education, International Pacific<br>University<br>721, Setocho Kanonji, Higashi-ku Okayama-shi, Okayama,<br>709-0863 |
| 10) 金沢星稜大学人間科学部<br>〒920-8620<br>石川県金沢市御所町丑10番地 1    | 10) Faculty of Human Sciences, Kanazawa Seiryō University<br>10-1 Ushi, Goshō-machi, Kanazawa, Ishikawa, 920-8620                           |
| 11) 太成学院大学人間学部<br>〒587-8555<br>大阪府堺市美原区平尾1060-1     | 11) Faculty of Human Studies, Taisei Gakuin University<br>1060-1 Hirao, Mihara-ku, Sakai, Osaka, 587-8555                                   |
| 12) 拓殖大学商学部<br>〒112-0006<br>東京都文京区小日向 3-4-14        | 12) Takushoku university Faculty of Commerce<br>3-4-14 Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8585   |
| 13) 静岡大学大学院教育学領域<br>〒422-8529<br>静岡市駿河区大谷836        | 13) Academic Institute College of education Shizuoka University<br>836 Ohya, Suruga-ku, Shizuoka-Shi, Shizuoka-Ken, 422-8529                |
| 14) 早稲田大学スポーツ科学学術院<br>〒202-0021<br>東京都西東京市東伏見 3-4-1 | 14) Faculty of Sport Sciences, Waseda University<br>3-4-1 Higashifushimi, Nishi-Tokyo, Tokyo, 202-0021                                      |

## I. はじめに

平成7年度に総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブと表記）の育成が開始されてから20年を超える年月が経過した昨今、新たなクラブの創設は停滞している（清水・柳沢，2015，p.111）。その中で、総合型クラブの質的側面に問題意識を向け、クラブ経営の現場に対して影響を与えることを企図した動きが生じている。その動きとは、クラブ育成の成果について評価する意義を主張し、クラブ自身による経営改善を促すために評価指標を作成するというものである。体育・スポーツ経営学では、指標開発の重要性について、スポーツ政策の経営学という文脈からその意義を説く中西（2012）や、クラブ育成の学術レベルでの成果検証が必要だとする作野（2007）や清水（2008）などによって主張されてきた。実際に指標を作成するアクションも活発で、クラブ組織の持続的な成長を重視する指標（清水・柳沢，2015）やクラブの安定的発展に焦点化したもの（日本体育協会，2015）などが提起され、エビデンスに基づき経営改善を先導する取組が進められてきた<sup>注1)</sup>。

指標づくりを通じてクラブ育成現場へのインパクトを与えようとする実践志向の動向に倣い、本研究では、「クラブライフの豊かさ」という視点から、総合型クラブのアウトカムについて検討していきたい。総合型クラブは、スポーツ振興基本計画（2000年）においてスポーツ実施率の向上のための重要施策として示されて以来、スポーツ人口の増加策という文脈で語られることが多かったが、クラブ育成にはそれ以外の意義も想定できる。クラブの会員<sup>注2)</sup>は、同好の仲間との活動を通じて、「クラブライフの経験」を享受し、そしてその経験から何らかのアウトカムを獲得している。これこそが地域スポーツクラブを振興することの重要な意義である。こうした「会員からの視点」に立てば、この「クラブライフ」を豊かにし、アウトカムを最大化することこそが、クラブづくりの目指すところであるといえる<sup>注3)</sup>。しかしながら、このクラブライフという言葉の起点とする学術的な検討

は十分になされてきたとはいえない。体育・スポーツ経営学では、これまでにクラブ・サービス（CS）という概念が提起されてきたが、クラブライフについては明確な用語定義がなされないままに使用されてきた。今後の総合型クラブ研究を深化・発展させるために今なすべきことの一つは、クラブライフについての概念的な検討を進めるとともに、そのクラブライフがもたらすアウトカムについての評価指標を作成するといった研究であろう。

そこで本研究では、以下の二つの目的を設定する。第一に、総合型クラブにおける「クラブライフの豊かさ評価指標」の作成に向けた基礎的資料として、クラブライフによるアウトカムの構成要素を明らかにすることを目的とする。会員がクラブライフから獲得するアウトカムとは何かという問いに焦点化し、先行研究の検討による仮説設定から会員の「生の声」を各種調査によって掘り上げながらアウトカム項目<sup>注4)</sup>を作成する。第二に、構築されたアウトカム項目についての反証可能性や再現性を担保するために、その検討プロセスを詳細に跡づけることを目指す。エビデンスをベースとした評価指標の作成に向かう動きが活性化の中で、いかなるプロセスで指標構築を図るのかという方法論については、これまでの体育・スポーツ経営学研究では殆ど語られることがなかった。

以下ではまず、アウトカム項目の開発プロセス全体のアウトラインを提示し、その後、クラブライフの概念検討・仮説設定、会員調査、データ分析というプロセスの内実を明示しながら、クラブライフによるアウトカム項目を提示する。

## II. 「クラブライフ」によるアウトカム項目の作成方法

本研究では、主に政策形成などの領域で採用されている「コミュニティ・ベンチマーキング」という政策マーケティングの手法を参考に、「豊かなクラブライフ」によるアウトカム項目

を作成する。政策マーケティングとは、行政以外にも多様な政策の担い手（NPOや市民団体、町内会、学校、企業等）が存在していることを前提とし、住民が抱く「政策ニーズ」を調査した上で、そのニーズを満たすための政策や公共サービスを創造・提供することを目指して構築されたシステムである（玉村，2003）。その一手法であるコミュニティ・ベンチマーキングは、住民にとって重要な成果に評価指標を設定することを重要視した上で、その数値を測定して時系列的にモニタリングする方法とされ、地域の多様な主体が共通の成果を目指して並列的・自律的に活動する領域で利用することに強みがあるという（松橋ほか，2012）。参画主体の多様性を前提に「住民にとっての」成果を重視するこの手法は、会員の視点からアウトカム項目を構成しようとする本研究において活用可能であると考える。なぜならば、総合型クラブでは多様性のある地域住民が共通の理念に基づき自律的・並立的活動を展開しているからであり、また、本研究はそうした総合型クラブに関わる当事者たちが抱く「豊かなクラブライフ」を重視してアウトカム項目を作成するからである。そ

こで、こうしたコミュニティ・ベンチマーキングにおいて重要な要素となる「成果の実現」（インプット→アウトプット→アウトカム）に関する発想や、政策ニーズの把握のために実施する対象者の網羅的な調査といった視点を批判的に援用する。

従来のコミュニティ・ベンチマーキングでは、資源を政策推進組織へ「インプット（投入）」し、それによって政策推進組織が施策や活動を「アウトプット（産出）」することで、社会に「アウトカム（成果）」が提供されるというフローとして、政策実施によって成果が生まれるまでの道筋を理解してきた。本研究では、こうした従来の「政策推進主体」を起点とした因果関係（インプット→アウトプット→アウトカム）に関する発想を「会員個人にとっての」という視点から捉え直す。すなわち、クラブによるスポーツ教室等のサービスが会員に提供され（インプット）、そこで会員がどのような経験をし（アウトプット）、それによって会員や地域がどのように変わったのか（アウトカム）、という会員の目線から見た関係性を前提とする（図1）。こうした読み替えによって、会員の視



図1 会員にとってのインプット→アウトプット→アウトカム関係

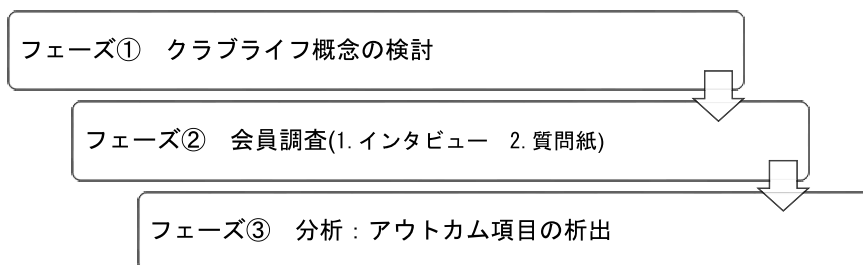


図2 アウトカム項目の作成プロセス

点からクラブライフとそのアウトカムの展開過程を理解することができる<sup>注5)</sup>。

さてⅢ以降では、アウトカム項目の作成に向けた3つ段階の詳細について確認する(図2)。「フェーズ① クラブライフ概念の検討」では、クラブライフの定義について検討するとともに、そのアウトカムについて演繹的に仮説を設定する(Ⅲ)。「フェーズ② 会員調査」を通じて、「豊かなクラブライフ」を経験する会員の認識についてデータを集める(Ⅳ)。「フェーズ③ 分析」において、収集したテキストデータを参考にしつつ仮説に修正(事後解釈)を加え、アウトカム項目を構成するカテゴリとサブカテゴリ<sup>注6)</sup>を析出する(Ⅴ)。

なお本研究では、こうした3段階の全過程において、14名の共同研究者で構成するプロジェクトチームを組織化し、協議を重ねつつアウトカム項目を作成した。専門家(地域スポーツに精通する研究者やクラブ経営実務の経験者)が有する知識や経験は、概念検討や調査設計を円滑に進めるのに有効な資源となった。また、「豊かさ」という価値を取り扱う中で、仮説構成や分析段階にて研究者個人の価値観が過度に反映される可能性がある中で、こうした複数の専門家による共同作業によって、そのバイアスを低減するよう試みた。

### Ⅲ. クラブライフ概念の検討 (フェーズ①)

クラブライフという用語に明確な学術的定義が与えられていないことは前述した通りだが、総合型クラブの会員への調査を設計するにあたり、その概念への検討を加えないまま研究を進めることはできない<sup>注7)</sup>。本研究は会員への調査からクラブライフによるアウトカムを析出するものであるため、被調査者がクラブライフにおける具体的活動を想起できるような調査項目を設定する必要がある。そのためにも、クラブライフをどのように捉えるかという本研究の立場を明確にしなければならない。そこでここで

は、調査設計の指針を提示することを目的にクラブライフ概念の検討を行う。

#### 1. 概念検討のプロセス

クラブライフの概念検討では、最初に、「豊かなクラブライフとは何か」という議題設定のもとで共同研究者間によるブレインストーミングを行い、想起される具体的な場面や行為に関する意見を出し合った。その際、研究対象を考慮して、クラブライフはスポーツクラブにおけるライフを前提として議論が進められた<sup>注8)</sup>。この議論の過程で、ライフを生活という意に解するという方向性に一致が見られ、生活概念を参酌しつつクラブライフ概念を検討した。その結果、クラブライフを「スポーツ生活」と「スポーツ生活以外の生活」の二領域から構成される生活として把握すべきであることが提議され、両生活の違いを明確にすることを意図した検討が進められた。

以下では、上記のプロセスにおける主要な論点を整理し、クラブライフ概念の定義とその内容を説明する。

#### 2. クラブライフ概念の定義とその内容

##### (1) 「クラブ」と「生活」

本研究において「ライフ=生活」とすることは前記の通りであるため、「クラブライフ=クラブ生活」と捉える。そこで、「クラブ生活」が「クラブ」と「生活」から成る複合語であることから、「クラブ」と「生活」がいかなる接続関係にあるのかを考察することから始める。「○○生活」と表現される用語は多く存在する。例として家庭生活と学校生活を挙げて考えてみると、まず、家庭生活は家庭における生活、学校生活は学校における生活というように、「おける(於ける)」という場を表す言葉を付置することで、「家庭」や「学校」が生活を営む場を意味していると理解できる。そして、「家庭」や「学校」が場の表現であると理解することで、その場で生活を営む主体が浮上する。すなわち、家庭の場合は家族の構成員であり、学校の場合

は児童や生徒、教師である。よって、「〇〇生活」の「〇〇」は第一義的には生活が営まれる場を表現し、付随して生活を営む主体を明確化しているのである。

このような「〇〇」と「生活」の接続関係から「クラブ生活」について考えると、クラブ生活が営まれる場はスポーツクラブであり、生活の主体は会員と定めることができる。では、その場において会員はどのような生活を営んでいるのであろうか。

## (2) スポーツ生活とスポーツ生活以外の生活

クラブライフが営まれる場はスポーツクラブである。スポーツクラブでは会員が様々な活動を行っており、クラブライフはそのような活動全体を指すものであると考えるが、前述した通り、調査設計上、より具体的な活動を示す必要がある。そこで議論の端緒として、体育・スポーツ経営学的視座からスポーツクラブを体育・スポーツ経営体と認識し、会員のクラブライフにおける具体的な活動を把握することにする。

### ①スポーツ生活

体育・スポーツ経営体としてのスポーツクラブは、自らが掲げる目標を達成するため体育・スポーツ事業を提供する。その事業は人々のスポーツに対する諸欲求を充足することを目的にクラブ会員によって行われ、供給されるサービスを会員や会員以外の住民が享受する。このように、体育・スポーツ経営体としてのスポーツクラブは、「複数の人間が共通の目標を持って組織を成立させ、この組織が主体となってプログラムを生産し、組織の一部あるいは全部のメンバーがそれを利用して欲求充足に至る形態」(清水, 2001, p.17)であり、清水(2001)が類型化したスポーツ生活の「一類型であると考えられる。つまり、スポーツクラブでは会員によるスポーツ生活が営まれており、そのスポーツ生活における活動はクラブライフの具体的な活動を構成すると捉えることができる。

より詳細に言及すると、スポーツ生活とは、「生活において生じたスポーツに関わる欲求や

必要を継続的・反復的に充足する過程」(清水, 2001, p.16)である。そして、その過程については、スポーツをしたいという欲求を出発点に、この欲求を満たすために必要なスポーツ生活財・資源が調達される。その後、スポーツ生活財・資源を活用し、活動の計画化・組織化が行なわれる。そして、実際にスポーツ実践を行うための準備を経たあと、スポーツ実践へと移る。次に後始末をし、これまでのスポーツ生活の過程を評価して、のちの生活過程に反映されることになる(清水, 2001, p.19)。

「この一連の過程を経ることによって、スポーツ生活者には新たな資源(諸知識や身体資源など)が蓄積される」(清水, 2001, p.19)わけであるが、本研究ではこのスポーツ生活過程でどのような資源が蓄積されるのかを捉える必要があり、それがクラブライフから得られるアウトカムの一部を構成する。

### ②スポーツ生活以外の生活

他方、スポーツクラブでは、体育・スポーツ経営体としてスポーツに関わる欲求を充足するための活動のみならず、それ以外の諸活動も会員によって行われている。本研究では、そのようなクラブライフにおけるスポーツ生活以外の活動を「スポーツ生活以外の生活」における活動として把握する。ここでは荒井(2003)を参考に、スポーツ活動以外の活動が繰り返げられる空間に着目し、スポーツ生活以外の生活について考察する。

荒井は、スポーツ空間を「実社会」「コートの外」「コートの中」という3つの空間から把握している。「実社会」は我々が生きる企業社会や学校社会などの社会であり、「コートの中」はスポーツ生活過程におけるスポーツ実践が行なわれる空間(場)を指す。では「コートの外」とは、どのような空間を意味するのか。

「コートの外」を端的に表現すれば、「ルールやロールやゴールを越えた、あるいは脱ぐ空間」(荒井, 2003, p.68)である。そこでは、実社会やコートの中での役割やルールなどに縛られることのない素の自分としての人間が在る。

実社会やコートの中での社会関係が競争を基調としているものであるのとは対照的に、コートの外の社会関係は「共存」である。クラブメンバーがあるがままにお互いに受け入れ、会員同士のつながりを深め、「同じ釜の飯を食う」空間として機能するのがコートの外と言える（荒井, 2003, pp.68-69）。

この空間は、本研究でいうスポーツ生活以外の生活が営まれる空間とほぼ一致していると考えられる<sup>注9)</sup>。例えば、クラブハウスで会話をしたり一緒に食事に出かけたりすることで親交を深めるようなことが想起される。特にクラブハウスでの活動は、スポーツ活動だけにとどまらない社会的活動や交流の場としての意義が見いだされている（松永, 2002）ように、スポーツ生活以外の生活ではコートから離れた空間で、共存関係を基とした会員間の様々な営みが展開されるのである。

以上から本研究では、クラブライフを「スポーツ生活」と「スポーツ生活以外の生活」の2つの生活から成るものと認識する（図3）。よって、クラブライフを「スポーツ生活」と「スポーツ生活以外の生活」との2つの生活の統一体として捉え、「会員が、クラブの仲間と一緒に、スポーツ生活やスポーツ生活以外の生活を営むこと」と定義する。本研究では、会員がそれぞれの生活における経験から獲得するアウトカムを捕捉することになり、具体的には、調査段階において、スポーツ生活における経験から

得られたアウトカムについての調査項目とスポーツ生活以外の生活における経験から得られたアウトカムについての調査項目を用意する。そして、それぞれの調査項目に対する回答から、クラブライフにおける経験から獲得されるアウトカムを明らかにできると考える。

### 3. アウトカムを分類するためのカテゴリー設定

#### (1) カテゴリーを構築する方法

本研究は総合型クラブ会員の生の声を拾い上げ、クラブライフを通じて獲得されるアウトカムを明らかにする。その手順として、データからの抽出が予期されるアウトカムを分類するためのカテゴリーを演繹的に設定し、調査結果の分析をもとにそのカテゴリーを修正してアウトカム項目を作成するという手順を採用した。

スポーツ活動が人間に与える身体的・精神的・社会的効果に関する先行研究の知見を援用すれば、抽出されるアウトカムを事前に予測し、アウトカムを分類するためのカテゴリーを設定することは可能である。調査データは、同じ意味内容のアウトカムを一纏まりとして整理するが、既知のアウトカムは前もって設けたカテゴリーに整理し、そのカテゴリーの下位次元を具体的に検討する。そして、そうでないものは新たなアウトカムとしてカテゴリーを新設する。そうして、事前に作り上げたカテゴリー群を修

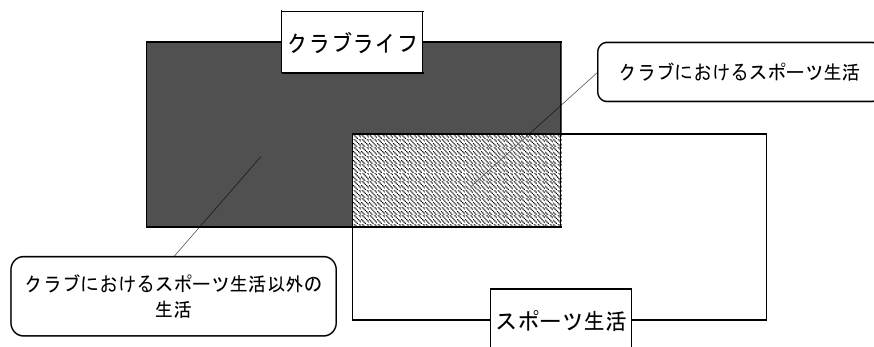


図3 クラブライフとスポーツ生活

正した新たなカテゴリー群が構築されることになる。この手法は、単に演繹的に導出されたアウトカムの存在を検証するだけでなく、既存のカテゴリー群を精緻化するとともに、新たなアウトカムを帰納的に発見することを目的とした手法である。

よって、この方法では、仮説の「事後解釈」(マートン, 1961)を行うことになる。仮説検証的アプローチにおいて仮説の事後解釈は、本来は自重すべき行為であるが、飽戸(1987)が「新しい仮説を引き出すための手段として、事後解釈が用いられるのであれば、これは理想的である」と述べているように、それが新たな仮説を生み出すことを意図したものであれば、仮説生成の手段として認められると考える。本研究は、仮説を検証する手法(演繹的に導出されたアウトカムの存在の検証)と併せて、結果の事後解釈によって新たな仮説を生成する(帰納的に未知のアウトカムを発見する)ことを企図するのである<sup>注10)</sup>。そこで先行研究を参考に、会員にとってのアウトカムとして7つの仮説的カテゴリーを設定した(表1)。

## (2) アウトカムを分類するための7つの仮説的カテゴリー

### ① つながり・信頼・ルール

スポーツクラブの社会的機能に関する言説としては、地域社会の維持統合としての役割(金崎, 2000)や地域再編のための生活拡充システムとしての期待(柳沢, 2002)が述べられているように、スポーツクラブでの活動が地域における人と人のつながりを構築し、地域社会再生

の一助となることが望まれている。このような言説を受けて想定できることは、クラブライフにおける諸活動を通じてメンバー同士の社会関係が形成され、それに付随する効果(連帯感や一体感など)が生じるということである。本研究では、このようなスポーツクラブの社会的機能を捉える概念として、ソーシャル・キャピタルを用いることにした。

ソーシャル・キャピタルは、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」(パットナム, 2001, pp.206-207)と定義されており、スポーツクラブ、文化協会、協同組合、労働組合などの自発的組織がソーシャル・キャピタルの蓄積に重要な役割を果たすとされている(パットナム, 2001)。内閣府国民生活局(2003)の調査では、ソーシャル・キャピタルの要素である「つきあい・交流」「信頼」「社会参加」に係わる項目で、その程度が高いと回答した人たちがボランティア・NPO・市民活動を行っているとする回答の割合が高いことを明らかにしていることから、スポーツクラブでの活動は自発的組織の市民活動として、ソーシャル・キャピタルの蓄積へとつながるであろう。事実、先行研究では、スポーツクラブへ参加することで、会員にソーシャル・キャピタルが蓄積されることが示唆されている<sup>注11)</sup>。

そこで、ソーシャル・キャピタルの構成要素を考慮し、「つながり」「信頼」「ルール」<sup>注12)</sup>という3つの仮説的カテゴリーを設定することにした。「つながり」は、「隣近所でのつきあいや社会的な交流が増えた」、「信頼」は、「一般的な信頼(一般的な人への信頼、見知らぬ土地での人への信頼)や相互信頼(近所の人々、親戚、友人・知人、職場の同僚への信頼)が増した」、「ルール」は、「社会参加の機会(地縁的組織への参加、ボランティア・NPO・市民活動への参加)が増えた」や「社会参加に関するルールが身についた」という意味内容のデータを分類することにした。

表1 7つの仮説的カテゴリー

1	つながり
2	信頼
3	ルール
4	いきがい
5	体力・健康
6	スポーツへの関わり
7	その他



## ②いきがい

高齢者のいきがいにとって、運動・スポーツ活動や社会的活動、他者との交流などが重要な要因として関連することが先行研究の結果で示されている（伊熊ほか，2006；高野・坂本，2005；岡本，2008；蘇ほか，2004）<sup>注13</sup>。スポーツクラブへの参加は、まさにそのような要因を多分に包含した社会的活動であり、クラブライフを通していきがいを実感する人びとの存在が予測される。また高齢者でなくとも、クラブライフを営むことがその主体にとって生きる糧となることが考えられるため、「いきがい」というカテゴリーを設定し、「クラブライフが生きるための目的の一つになった」のような意味を持つデータを分類することにした。

## ③体力・健康

スポーツや身体活動が人間の身体・精神へ及ぼす効果に関する先行研究では、まず、子どもの身体活動量と運動能力には正の相関関係があり、日常的に活動量が多い子どもはそうでない子どもに比べて運動能力が高い傾向にあることが実証されている（鈴木，2001；田中，2009；埜，2011；佐々木ほか，2013など）。また子どもについて、身体活動量の確保が睡眠時間の確保や食欲増進につながることを示した研究（中野ほか，2010）や在宅高齢者について、運動の実施状況が精神健康度と身体健康度に強く影響を及ぼしていることを明らかにした研究（青木，2014）がある。さらに、スポーツクラブへの所属が運動頻度の高さ、あるいは健康面に対しての好ましい生活習慣をもたらすこと（熊谷，2006）や体力の向上に寄与すること（宮下ほか，2010）が示唆されている。

以上から、クラブライフを通じて体力や運動能力の向上、精神的健康や生活習慣の改善がもたらされることが予想されるため、「体力・健康」というカテゴリーを設定した。この仮説的カテゴリーには、「身体的・精神的・社会的な

観点から健康が増進された」「運動技能や身体能力が向上したと認識するようになった」のような意味内容のテキストデータを布置する。

## ④スポーツへの関わり

スポーツクラブでは、スポーツ実践やスポーツサービスの生産過程に関与することにより、会員とスポーツとの多様な関わりが展開されている。会員はスポーツや他の会員との相互作用の中で、その関わりを構築・変化させながらクラブライフを営んでいる。例えば、スポーツクラブに入会することは、それまでスポーツを行ってこなかった人がスポーツを「する」という新たな関わりをスポーツと結び結ぶことである。また、スポーツをしたり観たりする時間が増加することもあるだろう。さらに、スポーツをするだけであった人が、スポーツ指導やクラブ運営に関わるようになることも考えられる。

このように、クラブライフを営むことにより、スポーツとの新たな関わりが形成されたり、その関わりが変化することが予想されることから、「スポーツへの関わり」という仮説的カテゴリーを設定した。この仮説的カテゴリーには、「スポーツに多様な関わり（する、みる、創る・支える）ができるようになった」のような意味内容のデータを分類する。

## ⑤その他

事前に予期できないアウトカムが抽出されることを考慮し、「その他」のカテゴリーを設定した。前述したように、仮説的カテゴリーの設定時では、既に明らかになっているアウトカムを明確化・精緻化するとともに、未だ明らかになっていないそれを発見する余地を残さなければならぬ。「その他」のカテゴリーは未知のアウトカムを見つけ出すためのものであり、このカテゴリーを設定することで、従来の研究では見落とされてきたアウトカムを抽出することができると思われる。

#### IV. 会員調査（フェーズ②）

「豊かなクラブライフ」とそこから享受するアウトカムに関する情報を収集するために、総合型クラブの会員に対して、インタビュー調査と質問紙調査を実施した。インタビュー調査は、2015年12月から2016年3月にかけて実施し、質問紙調査は、2016年2月から3月にかけて順次、配布・回収を行った。以下では、各調査の概要について述べていく。

##### 1. インタビュー調査（フェーズ②-1）

「豊かなクラブライフ」の実態とアウトカムをめぐるリアリティに富む情報を集めることを目的に、「豊かなクラブライフ」を経験する会員を年齢・属性別に区分し、全ての区分の対象を網羅するようにインタビュー調査を行った。対象クラブは、筆者らが実施した先行調査の結果に基づき「豊かなクラブライフ」が実現していると想定されるクラブ<sup>注14)</sup>の中から、会員規模や所在地に偏りがなく、調査が実現可能である10クラブを選定した（表2）。そして、この10クラブの中から、公的機関が発行する事例集等を参考に、共同研究者間での協議を経て、当該クラブで豊かなクラブライフを享受していると想定できる対象（フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）：12組、デプス・インタビュー（DI）：8名）を選んだ。概要は表3の通りである<sup>注15)</sup>。

表2 インタビュー調査の対象クラブ

クラブ名	所在地	会員数	設立年
Aクラブ	宮城県	1000～1299人	平成13年
Bクラブ	茨城県	500～699人	平成19年
Cクラブ	栃木県	200～299人	平成15年
Dクラブ	埼玉県	100～199人	平成12年
Eクラブ	千葉県	500～699人	平成13年
Fクラブ	東京都	300～499人	平成19年
Gクラブ	神奈川県	300～499人	平成18年
Hクラブ	静岡県	100～199人	平成21年
Iクラブ	大阪府	300～499人	平成16年
Jクラブ	岡山県	300～499人	平成18年

こうした全国規模の調査を効率的に進めるために、共同研究者の分担でインタビューを行うこととした。FGIは、インタビュー2～6名1組に対して2名の調査者が90分の聞き取りを実施することを基本とした。またDIは、インタビュー1名に対して1名の調査者が60分の調査を実施した。複数のインタビューアの分担で調査を遂行するため、ヴォーンほか（1999）を参考にインタビューガイドを作成するとともに、事前にインタビューア説明会を実施し質問項目や注意事項を確認することで、調査者間の共通認識を形成するよう努めた。なお、質問内容については、クラブライフの定義に基づき、対象者が「豊かなクラブライフ」について語りやすいように表4の通り設定した。

表3 インタビュー調査の区分・対象・方法・実施回数

No.	区分	対象	方法	回数
1	子ども	小学生	FGI	2組（Gクラブ1組、Hクラブ1組）
2		中学生		2組（Eクラブ1組、Hクラブ1組）
3	18～39歳	2組（Aクラブ1組、Fクラブ1組）		
4	成人	40～59歳		2組（Eクラブ1組、Gクラブ1組）
5		60歳以上		2組（Aクラブ1組、Bクラブ1組）
6	障害者	障害者	DI	2組（Cクラブ1組、Dクラブ1組）
7	運営者	クラブマネジャー		2組（Iクラブ1組、Jクラブ1組）
8		アシストマネジャー		2組（Iクラブ1組、Jクラブ1組）
9		指導者		2組（Iクラブ1組、Jクラブ1組）
10		ボランティアスタッフ	FGI	2組（Aクラブ1組、Fクラブ1組）

表4 インタビュー調査における主要な質問項目

<b>【スポーツ生活について】</b>
・〇〇クラブでのスポーツ活動において、あなたが楽しさや喜びを感じるのはどのようなときですか？
・〇〇クラブでスポーツ活動を行うことによって、あなたが変化したと感ずることや得たものは何ですか？また、どのような場面でそう感じましたか？
・〇〇クラブでスポーツ活動を行うことによって、周りの方が変化したと感ずることや得たものは何ですか？また、それはどのような時に感じましたか？
<b>【スポーツ生活以外の生活について】</b>
・〇〇クラブでのスポーツ活動以外の場面において、あなたが楽しさや喜びを感じるのはどのようなときですか？
・〇〇クラブでのスポーツ活動以外のクラブ生活を送ることによって、あなたが変化したと感ずることや得たものは何ですか？また、どのような場面でそう感じましたか？
・〇〇クラブでのスポーツ活動以外のクラブ生活を送ることによって、周りの方が変化したと感ずることや得たものは何ですか？また、それはどのような時に感じましたか？
<b>【豊かなクラブライフについて】</b>
・みなさんが考える「豊かなクラブライフ」について説明してください。

## 2. 質問紙調査（フェーズ②-2）

インタビュー調査では、「豊かなクラブライフ」に関する実態やその文脈を詳細に把握したが、質問紙調査では、より多くの会員の「豊かなクラブライフ」についてデータを収集することを目的とした。調査票の質問内容は、インタビュー調査に準じて設計し、回答は自由記述で集めた。自由記述にすることで回答者への負荷が上がり、回収率の低下が予想されたが、「豊かなクラブライフ」に関連する発言を引き出すうえでは有効な方法だと考えた。調査対象クラブは、回答者へ大きな負担がかかるため、調査の実現可能性を重視して設定することとし、共同研究者のメンバーが既にラポールを形成しているクラブの中から、公的機関が発行する事例集等の情報を踏まえながら共同研究者間での協議を経て、3つのクラブを対象とした<sup>注16)</sup>。調査票をクラブの事務局へまとめて郵送し、それらの調査票を対象となるクラブ会員に配布して、回答後に回収・返送いただいた。各クラブ200枚、合計600枚を送付し、122名から回答を得た<sup>注17)</sup>。

収集したデータは、インタビュー調査の音声データは逐語記録を基本とし、質問紙調査の自由記述内容も同様にテキスト化し、分析用の

データを作成した。これらの全てのデータはテキストデータ（質的データ）であること、インタビューと質問紙調査の質問項目がほぼ同一であることに鑑み、両調査で収集したデータを合わせて分析することとした。

## V. 分析：アウトカム項目の析出

アウトカムの分析と可視化を次の3段階で行った<sup>注18)</sup>。1次分析では、逐語記録から「重要アイテム」（クラブライフの経験やアウトカムに関する意味深い内容）を抽出し、それぞれに仮説的カテゴリーを付与した。2次分析においては、表3で示した「調査区分」（「子ども」「成人」「障害者」「運営者」）ごとに、重要アイテムの内容を確認しつつ、一定の共通した意味を持つアイテムを一纏めにした「サブカテゴリー案」を作成した。3次分析では、2次分析で析出したサブカテゴリー案に検討を加え、全ての調査区分の会員が共通して得る可能性があるカテゴリー・サブカテゴリーを確定した。

なお、膨大な数の質的データを効率的に分析するために、全14名の共同研究者が関与するかたちで分析を進めた。1次分析では、共同研究

者2人1組で各逐語記録の分析を担当することを基本とし、2次分析では、共同研究者14名を4つの作業グループに分け、各グループが4つの調査区分のいずれかについて分析した。最終段階の3次分析では、共同研究者全14名が対面での会議に加わり、合意が形成されるまで議論を行った。

### 1. 1次分析：重要アイテムの抽出・仮説的カテゴリーの付与

まず、インタビュー調査の20の逐語記録（表3参照）と質問紙調査（回答数：122）の自由記述から、「重要アイテム」を抽出し、一覧を作成した。続いて、「友人が増えたと思う」「クラブに通うことで日常にメリハリがついた」のように、アウトカムに関連した重要アイテムに対して、「つながり」「信頼」「ルール」「いきがい」「体力・健康」「スポーツへの関わり」「その他」のフェーズ①で事前に想定した7つの仮説的カテゴリーを付与した。その際、アウトカムが生じた文脈を理解するために、「スポーツ教室に参加した」「クラブハウスで会話をした」のような、実際に起こったクラブライフの活動や場面については、「背景」や「回答者の活動状況」としてそれぞれの重要アイテムと関連づけて整理した。なお、この分析の実施者は、インタビュー調査におけるインタビュアー、及び質問紙調査におけるクラブへの依頼者といった、発言や回答の文脈に精通した担当者とした。

### 2. 2次分析：調査区分ごとにサブカテゴリー案を生成

共同研究者14名を4つの作業グループに分け、

各グループが調査区分（「子ども」「成人」「障害者」「運営者」）のいずれかを担当する形で分析を進めた。各グループにおいては、まず、1次分析で抽出した重要アイテムの内容とそれに付与した仮説的カテゴリーが一致しているかどうかについて、その解釈の妥当性を確認した。次に、それぞれの仮説的カテゴリー内で一定の共通の意味を持つ重要アイテムをサブカテゴリー案としてディカッションにより集約した。サブカテゴリー案とは、サブカテゴリーを確定させる際の素材となる重要アイテムの束のことであり、続く3次分析では、このサブカテゴリー案の名称やそこに含まれる具体的なデータについて、調査区分間の共通点や相違点を確認しながら、全ての調査区分に共通するサブカテゴリーを確定させていくことになる。

この2次分析では、膨大な数の口述データを子ども、成人、障害者、運営者という4つの調査区分で分割し、それぞれの調査区分において意味内容が類似する重要アイテムをサブカテゴリー案としてまとめた。このように4つの調査区分別でサブカテゴリー案を生成したのは、世代や属性といった文脈に一定の共通性があることで、類似する語りをより識別しやすくし、効率的にサブカテゴリー案をするためである。こうした分析作業を通じて生成したサブカテゴリー案の数は表5の通りである。なお本研究では、アウトカムの要素の網羅性を重視するため、サブカテゴリーに含まれる重要アイテムの数は問わず、出現数の少ないものも、一つのサブカテゴリー案として成立させることとした。

表5 二次分析の結果（サブカテゴリー案の数）

	つながり	信頼	ルール	いきがい	体力・健康	スポーツへの関わり	その他
子ども	6	4	4	3	7	10	11
成人	7	3	4	0	10	9	10
障害者	2	4	2	1	1	1	5
運営者	16	5	3	3	7	7	7
計	31	16	13	7	25	27	33

### 3. 3次分析：サブカテゴリーの確定・仮説的カテゴリーの修正

まず、会員が獲得する可能性のあるアウトカムを網羅したサブカテゴリーを生成することを目的に、共同研究者14名全員が参画した議論を通じて、2次分析で生成したサブカテゴリー案を再編した。再編にあたっては、重要アイテムの内容を再確認しながら、サブカテゴリー案の集束的妥当性について検討し、サブカテゴリーを確定した。基本的には、抽象度の高い意味内容を含むサブカテゴリー案は分割し、類似する

意味内容を持つものは集約するという方法で、サブカテゴリーを決定した<sup>注19)</sup>。

続けて、集束したサブカテゴリーの構成を踏まえつつ、仮説的カテゴリーに修正を加えた。この過程で、仮説的カテゴリーの「体力・健康」を「健康」に修正し、「その他」に区分された重要アイテムの分析から「学び」のカテゴリーを新設した。最終的に、アウトカムを構成するカテゴリーとサブカテゴリーは、表6のとおりとなった。

以下では、この3次分析によってカテゴリー

表6 「豊かなクラブライフ」によるアウトカムを示すカテゴリーとサブカテゴリー

<b>100 つながり</b>	<b>500 健康</b>
定義:クラブライフによって生じた他者とのつきあいや交流	定義:身体的・精神的な観点から自らの状況が改善されること、並びに健康意識や生活習慣が改善されること
111 家族(同世代)	511 【身体的】体力・身体能力の維持・向上
112 家族(異世代)	512 【身体的】体調改善・疾病予防
121 プログラム内(同世代)	513 【身体的】体型の維持・改善
122 プログラム内(異世代)	521 【精神的】積極的・前向きな心情
131 クラブ内(同世代)	522 【精神的】リラックス・ゆとり
132 クラブ内(異世代)	523 【精神的】気晴らし・爽快感
141 クラブ外(同世代)	531 健康意識の向上
142 クラブ外(異世代)	532 生活習慣・メリハリある生活
151 多様な他者とのつながり	
<b>200 信頼</b>	<b>600 スポーツへの関わり</b>
定義:家族や会員といった特定の個人や、クラブや広く地域全般に対して、期待認識を持つようになること	定義:スポーツ活動への多様な関わりの実現
211 家族間の信頼	611 スポーツを行うことへの関心・好意
212 会員間の信頼	612 スポーツの実施時間の増加・継続性の向上
213 クラブへの信頼	613 技術・競技成績の向上
214 地域への信頼	614 実施種目の増加
	615 クラブ外の競技会・イベントへの参加
	621 スポーツを見ることへの関心・好意
	622 スポーツを見る時間の増加
	623 会員の応援
	631 スポーツに関する知識の獲得
	632 スポーツの多様な志向性・価値の理解
	641 スポーツに関する会話の増加
	651 クラブ運営・スポーツ指導に関する能力の向上
<b>300 ルール</b>	
定義:互いのクラブ活動を円滑に営むための規範の習得と、それを基礎としたクラブへの協力や会員同士の互助意識の醸成	
311 社会規範(あいさつ、時間を守るなど)の習得	
312 クラブの活動への協力	
313 会員同士の助け合い	
<b>400 いきがい</b>	<b>700 学び</b>
定義:楽しさや充実感、やりがい・自己実現といった自らの心的充実を果たすことのできる欲求の充足過程	定義:スポーツ以外の知識習得や、他者理解、全人的な成長という観点から新たな事柄を身につけること
411 楽しさ(即時)	711 スポーツ以外の知識の広がり
412 充実感(短期)	712 多様な他者の理解
413 やりがい・自己実現(中長期)	713 人間的成長

とサブカテゴリーを導出した手続きについて概説する。基本的には上述の通り、サブカテゴリー案の分割・統合といった基本の手続きを採用したが、非常に多くの重要アイテムが該当した「つながり」や、かなり抽象的な仮説を設定していた「いきがい」については、共同研究者がサブカテゴリー案や生のデータの状況を踏まえつつ議論し、サブカテゴリーの枠組みを決定した。

### (1) つながり

このカテゴリーには非常に多くの重要アイテムが該当したため、こうしたサブカテゴリー案を踏まえながら共同研究者で協議をし、9次元のサブカテゴリーとして再編した。2次分析で抽出されたサブカテゴリー案の内容をみると、つながりや交流が生まれる場面に焦点化して、教室（プログラム）内なのか、クラブ内なのか外なのか、という「範囲」を対象にしたものと、異なる世代との交流といった「世代」を対象にしたものに大きく分けられた。サブカテゴリー

をまとめるに際し、まず、つきあいや交流が発生している範囲として、家族、プログラム内、クラブの内側、クラブの外側の4つを特定し、さらに、その交流の範囲に対して「世代」の視点を加味するために、同世代と異世代の2つの区分を採用した。4つのつながりの範囲でそれぞれ同世代と異世代を分けることで、8次元のサブカテゴリーが生まれ、さらに、世代の違いだけでなく様々な差異を持つ人々とのつながりが生じるという口述があることから、「多様な他者とのつながり」を加え、9次元とした(図4)注20)。

### (2) 信頼

2次分析では計16のサブカテゴリー案を生成し、このサブカテゴリー案を図5のように再編し、「211 家族間の信頼」「212 会員間の信頼」「213 クラブへの信頼」「214 地域への信頼」という4次元のカテゴリーとして確定した。ここでは、家族や会員間という個々の関係における

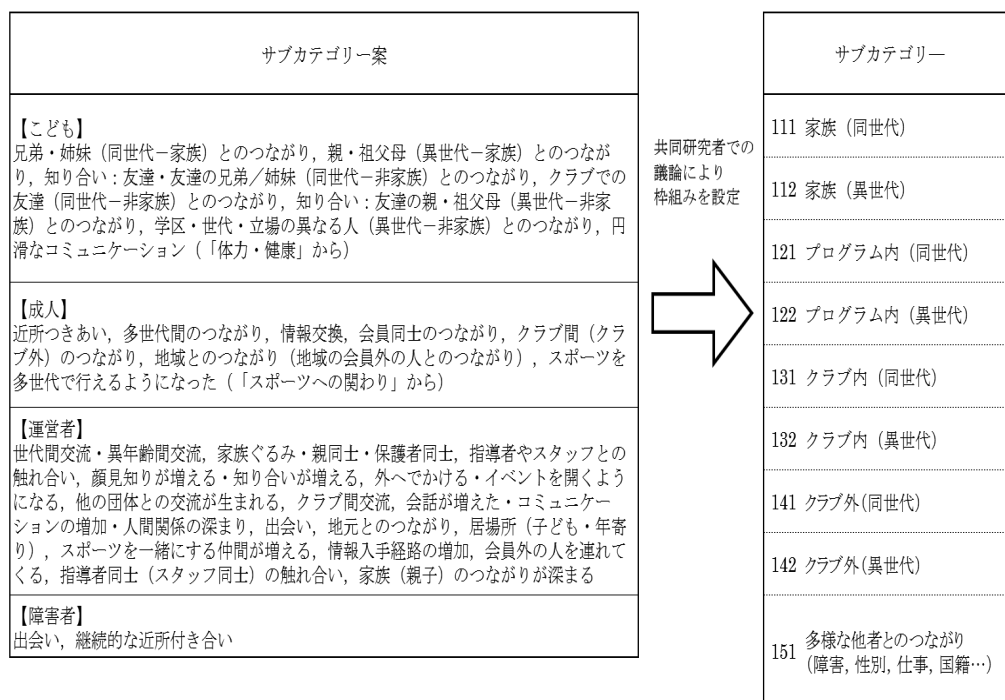


図4 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応（つながり）

信頼内容と、クラブや当該地域社会に対する信頼内容を抽出できた<sup>注21)</sup>。

(3) ルール

2次分析で生成したサブカテゴリー案は計13であり(表5)、それを再編し、「311 社会規範の習得」「312 クラブの活動への協力」「313 会員同士の助け合い」の3次元のサブカテゴリーとして確定した(図6)。「社会規範の習得」は、子ども世代に多く見られた項目で、クラブライフや他の生活場면을円滑に進めるために重要となる挨拶などの基本的な社会的なルールを身につける内容のものである。そして、それらの規

範を活かしてクラブにおける運営や指導、手伝いなどを行うことが「クラブの活動への協力行動」であり、さらにはクラブライフやそれ以外の生活領域における相互扶助が「会員同士の助け合い」である<sup>注22)</sup>。

(4) いきがい

2次分析で抽出したサブカテゴリー数は計7であり(表5)、ここでは、サブカテゴリー案からサブカテゴリーを構成する一般的な方法が適用できなかったため、サブカテゴリーを演繹的に導出することとし、欲求充足過程における到達やその持続にかかる時間幅及び欲求階層の

サブカテゴリー案 (括弧内は調査対象者)	サブカテゴリー
家族間の信頼(成人・運営者)、家族間の相互扶助(成人、「その他」から)、家族への気持ちの変化(成人、「その他」から)	➡ 211 家族間の信頼
仲間意識(子ども・障害者)、集団意識(子ども)、仲間への感謝・気づかい(子ども)、会員間の信頼(成人・運営者)、大人への信頼(障害者)、周囲の理解(障害者)	➡ 212 会員間の信頼
場としてのクラブへの信頼(子ども)、クラブへの信頼(成人)、ここだから許せる(障害者)、同じ想いを共有できて安心(運営者、「その他」から)	➡ 213 クラブへの信頼
地域との信頼(運営者)、地域の安全(運営者、「その他」から)	➡ 214 地域への信頼

図5 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応(信頼)

サブカテゴリー案 (括弧内は調査対象者)	サブカテゴリー
あいさつ(子ども)、スポーツ場面で規律を守ること(子ども)、学校生活への波及効果(子ども)、家庭生活への波及効果(子ども)、地域での社会規範を学ぶことができる(成人)、日常作法の習得(障害者)	➡ 311 社会規範の習得
会員間の相互扶助が行われる(成人)、支えるようになった(成人、「スポーツへの関わり」から)、スポーツへ多様な関わりができるようになった(成人、「スポーツへの関わり」から)、クラブ内での役割ができた(成人、「その他」から)、クラブ運営に対する相互扶助が行われる(個人として)(運営者)、参加者から運営者へ(運営者、「スポーツへの関わり」から)、参画(障害者)	➡ 312 クラブの活動への協力
会員間の相互扶助が行われる(成人)、地域内の相互扶助が行われる(成人)、ボランティアを行うようになる(成人)、クラブ外での役割ができた(成人、「その他」から)、地域内での相互扶助が行われる(運営者)	➡ 313 会員同士の助け合い

図6 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応(ルール)

考え方に基づいて、3次元のサブカテゴリーを生成した(図7)。まず、即時的な欲求充足としての「411 楽しさ」、次に、短期的な欲求充足過程としての「412 充実感」、そして、中長期的な欲求充足過程としての「413 やりがい・自己実現」であった<sup>注23)</sup>。

### (5) 健康

調査区分別の分析で設定したサブカテゴリー案は計25であり(表5)、これらを再編し、8次元のサブカテゴリーを生成した(図8)。身

体的観点として「511 体力・運動能力の維持・向上」「512 体調改善・疾病予防」「513 体型の維持・改善」、精神的観点として「521 積極的・前向きな心情」「522 リラックス・ゆとり」「523 気晴らし・爽快感」であった。そして、全般的な健康に関わるサブカテゴリーとして「531 健康意識の向上」「532 生活習慣・メリハリある生活」を設定した。なお、仮説的カテゴリーの名称は「体力・健康」であったが、それを変更した理由は、体力が身体的健康に含まれると考えたためである<sup>注24)</sup>。

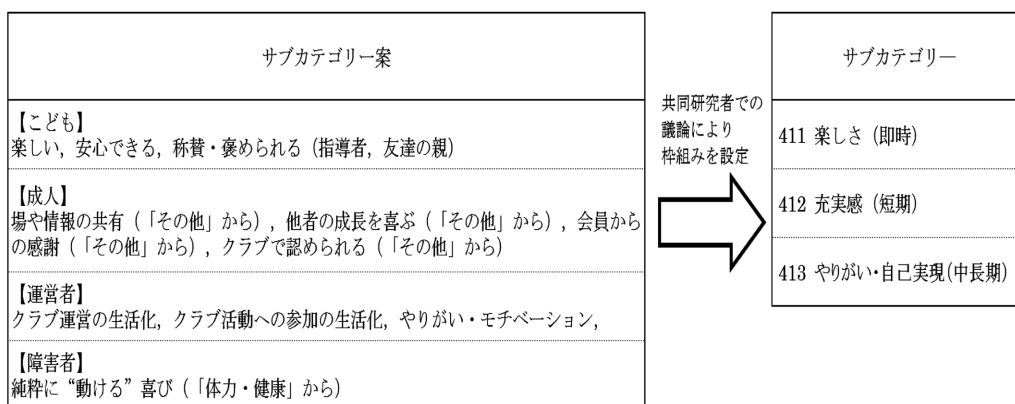


図7 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応 (いきがい)

サブカテゴリー案 (括弧内は調査対象者)	サブカテゴリー
元気になる (子ども), 体力の向上 (子ども), 足が速くなる (子ども, 「その他」から), 身体能力の維持・向上 (成人), 身体能力の向上 (運営者), 複合的な健康 (運営者)	511 体力・運動能力の維持・向上
元気になる (子ども), 体調・健康の維持・改善 (成人), 複合的な健康 (運営者)	512 体調改善・疾病予防
体型の変化・改善 (子ども), 体型の維持・改善 (成人)	513 体型の維持・改善
元気になる (子ども), 積極性・前向きになる (成人), 前向きな気持ち (運営者)	521 積極的・前向きな心情
精神的なゆとりが生まれる (子ども), リラックス・気晴らし・すっきりする (成人), 心のなごみ・リラックス・精神的余裕 (運営者)	522 リラックス・ゆとり
発散・気晴らし・すっきりする (子ども), リラックス・気晴らし・すっきりする (成人), ストレス発散・爽快感 (運営者), 他の活動への活力 (運営者, 「その他」から)	523 気晴らし・爽快感
健康に対する意識 (成人), 複合的な健康 (運営者)	531 健康意識の向上
生活習慣の向上 (子ども), 生活のメリハリ (成人), 生活習慣の改善 (運営者)	532 生活習慣・メリハリある生活

図8 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応 (健康)



(6) スポーツへの関わり

この仮説的カテゴリーで生成した計27のサブカテゴリー案について、図9のように再編し、12次元のサブカテゴリーを設けた。具体的には、スポーツを「する」という観点から「611 スポーツを行うことへの関心・好意」「612 スポーツ実施時間の増加・継続性の向上」「613 技術・競技成績の向上」「614 実施種目の増加」「615 クラブ外の競技会・イベントへの参加」、スポーツを「見る」という観点から「621 スポーツを見ることへの関心・好意」「622 スポーツを見る時間の増加」「623 会員の応援」を設定した。また、スポーツを「学ぶ」という観点から「631 スポーツに関する知識の獲得」、スポーツを「話す」という観点から「641 スポーツに関する会話の増加」、スポーツを「支える」という観点から「クラブ運営・スポーツ指導に関する能力の向上」を生成した<sup>注25)</sup>。

(7) 学び

新たなアウトカム生成の可能性を担保するために「その他」という仮説的カテゴリーを設定していたが、得られたデータの検討から、スポーツ以外の知識習得や、他者理解、全人的な成長という観点からの変容に関する内容が確認されたため、新たに「学び」というカテゴリーを定めた。調査区分別の分析では33のサブカテゴリー案を抽出したが(表5)、これらの多くは共同研究者によるディスカッションを通じて、他のサブカテゴリーに組み入れた<sup>注26)</sup>。そして、他の6つのカテゴリーのどこにも包摂できなかったサブカテゴリー案を再編し、「711 スポーツ以外の知識の広がり」、「712 多様な他者の理解」、「713 人間的成長」の3次元を設定した(図10)。

以上が、クラブライフによるアウトカムを示す7つのカテゴリーである。これらを概観する

サブカテゴリー案 (括弧内は調査対象者)	サブカテゴリー
運動することへの興味・関心(子ども)、スポーツが好きになった(子ども)、競技への興味・関心(子ども)、スポーツに張り合いや勝負が生まれるようになった(子ども、「その他」から・成人)、良いプレーができてうれしい(成人、「体力・健康」から)	➡ 611 スポーツを行うことへの関心・好意
スポーツの実施時間が増えた(子ども)、スポーツを続けて行うようになった(成人)、子どものスポーツ機会の拡大(運営者)、スポーツの実施 <sup>(障害者)</sup>	➡ 612 スポーツの実施時間の増加・継続性の向上
技術・スキルの向上(子ども、「その他」から)、技術的な向上(成人、「体力・健康」から)、結果や成績の向上(運営者、「体力・健康」から)	➡ 613 技術・競技成績の向上
多種目を行うようになった(成人)、複数種目への参加(運営者)	➡ 614 実施種目の増加
試合観戦やイベントに参加するようになった(子ども)	➡ 615 クラブ外の競技会・イベントへの参加
トップ選手のプレーに関心を持つようになった(子ども)、映像をみるようになった(子ども)、会員のプレーを見るようになった(子ども)、トップ選手のプレーに関心を持つようになった(成人)、会員のプレーを見るようになった(成人)、見るスポーツという関わり(運営者)	➡ 621 スポーツを見ることへの関心・好意
映像をみるようになった(子ども)、会員のプレーを見るようになった(子ども)、会員のプレーを見るようになった(成人)、見るスポーツという関わり(運営者)	➡ 622 スポーツを見る時間の増加
仲間の応援をするようになった(子ども)	➡ 623 会員の応援
競技への興味・関心(子ども)、知識の習得(成人、「体力・健康」から)	➡ 631 スポーツに関する知識の獲得
スポーツへの理解(子ども、「その他」から)、スポーツに張り合いや勝負が生まれるようになった(子ども、「その他」から・成人)、多様なスポーツへの志向性を知るようになった(成人)、スポーツの価値観の変容(運営者)	➡ 632 スポーツの多様な志向性・価値の理解
スポーツの話題を話すようになった(子ども)	➡ 641 スポーツに関する会話の増加
指導者としての資質向上(運営者)	➡ 651 クラブ運営・スポーツ指導に関する能力の向上

図9 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応(スポーツへの関わり)

サブカテゴリー案 (括弧内は調査対象者)	サブカテゴリー
地域への関心 (成人), 異文化交流 (成人), 他会員からの学び (成人), 新しい学び (運営者), 学校との違い (障害者)	711 スポーツ以外の知識の広がり
多様な考えを認める (子ども), 多様性への理解 (成人), 市民育成の支援 (運営者), 特別扱いしない (運営者, 「信頼」から), 過ごす時間 (運営者, 「信頼」から), 特別扱いされないこと (障害者), 社会の理解 (障害者)	712 多様な他者の理解
達成感 (子ども), 優越感 (子ども), 主体性・自発性 (子ども), 成長・変化 (子ども), コミュニケーション力 (子ども), 協力することの喜び (子ども), 社交性の習得 (成人, 「つながり」から), 主体性発揮 (障害者), 親離れ・子離れ (障害者)	713 人間的成長

図10 サブカテゴリー案とサブカテゴリーの対応 (学び)

と、「つながり」、「信頼」、「ルール」は、仮説段階で依拠したソーシャル・キャピタル論で提起されている3つの主要概念と重なる部分が大きく、社会関係資本の獲得という側面を強く有する。そして、「いきがい」や「健康」、「スポーツへの関わり」「学び」に関しては、スポーツ文化論におけるコートの内外におけるスポーツの機能に深く関連するとともに、会員個人における文化的資本の獲得という側面が見いだせる。

## VI. むすび

本研究では、クラブライフに関する概念検討・仮説設定、会員調査による「生の声」の収集、共同研究者の協議を中心とした分析作業という一連のプロセスを通じて、クラブライフによってもたらされるアウトカム項目を作成した。その結果、「つながり」「信頼」「ルール」「いきがい」「健康」「スポーツへの関わり」「学び」という7つのカテゴリーで構成されるアウトカムと、各カテゴリーの下位次元を明らかにできた(図11)。また本稿では、このアウトカム項目の作成作業の一連のプロセスの内実を示すことができた。

本研究の意義は、第一に、総合型クラブ育成の成果検証が重要な研究課題の一つとして提起されている中で、これまで焦点化されることがなかった「クラブライフの豊かさ」に着目したアウトカム項目を示すことができた点である。

総合型クラブの質的发展が求められる状況において、組織の成長性や安定性といった「クラブ経営者の目線」からの指標ではなく、クラブライフを営む人びとを中核に据えて成果を考えることを重視したアウトカム項目を新たに提示し、今後の指標構築に向けた一つの起点をつくることができた<sup>注27)</sup>。第二に、評価指標の作成に関する方法論において新たな視点を提起したことである。本学術領域ではスポーツ政策の評価という視点が重要視されつつあるが、いかに指標を構築するべきかという方法論については、これまで学術誌上で議論されることはなかった。本稿では、当事者である会員の認識を起点として、複数の専門家による共同作業を通じてアウトカム項目を検討するプロセスを明記することができ、今後の方法論議における一つの準拠点を示すことができたといえる。第三は、クラブ育成現場へのインパクトという観点からの意義である。「豊かなクラブライフ」という視点からアウトカム項目を明示したことにより、スポーツ人口の増加というコンテキストとは異なるクラブ育成の「目指すべき方向性」の一つを提示できたのではないか。会員同士が一緒に営む「スポーツ生活」と「スポーツ生活以外の生活」を豊かにし、そのアウトカムを高めるといふ視点を普及させることは、混迷状況にある運営者にクラブが目指すところ、クラブの理念や経営目標を再検討する契機を与えることにも寄与することになるだろう<sup>注28)</sup>。

ただし、本研究が一定の限界性を有する点に

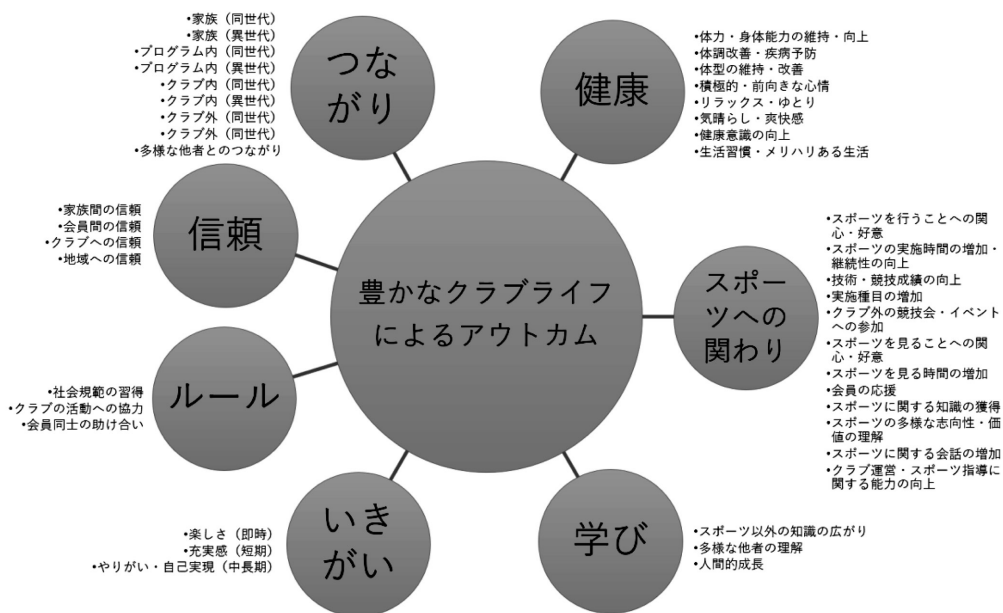


図11 豊かなクラブライフによるアウトカム (概念図)

は留意が必要である。第一に、アウトカム項目の検討過程において、研究者個人が有する価値基準というバイアスを低減するための様々な方法論的な配慮を施したものの<sup>注29)</sup>、その影響が完全には否定できない点である。第二に、会員の認識について網羅的に意見を回収することに努めてきたが、多様な様相を呈するクラブライフをめぐる会員の認識をすべて網羅しきれていない可能性は少なからず存在する点である。第三に、調査・分析方法の特性上、そもそも総合型クラブにおける当事者が認識できないことは、このアウトカム項目には反映されないということである。

今後の課題は、このアウトカム項目を調査可能な尺度とし、実際の経営評価に活用していくことである。クラブライフの経験の差異がアウトカムに与える影響についても、検討が求められよう。さらには、そうした評価観点を「目指すべき方向性」として情報発信し、クラブ育成に携わる人々に対して、「目指すべき方向性」を再考する契機を提供していくことも、体育・スポーツ経営学における実践現場への対応として求められる。

注

注1) 日本体育・スポーツ経営学会では、研究集会等を通じて、総合型クラブ育成の在り方について継続的に検討してきた。その中で提起された論点の一つが、評価指標の構築であったことから、評価に関する学術的検討は重要な課題といえる。

注2) 会員には、スポーツ教室の参加者など、クラブからスポーツサービスを楽しむ一般会員に加えて、マネージャーや指導者、ボランティアスタッフなどの運営者も含む。運営者と一般会員(非運営者)では、クラブでの活動内容に多少の異同が生じることが推察されるが、本研究で重視する「クラブライフでの経験を通じたアウトカムの獲得」という観点においては共通していることから、両者をともに会員として捉える。

注3) 清水・柳沢(2015)や日本体育協会(2015)による指標にも、「クラブライフの質の向上」や「クラブライフの定着」という表現が含まれており、クラブライフという発想の重要性が窺えるものの、その詳細が示されているわけではない。

注4) 本研究では、アウトカム項目を、会員が享受する可能性のあるアウトカムを構成するカテゴリー（構成要素の区分）とその下位次元としてのサブカテゴリーのこととする。

注5) 「インプット」も会員にとってのクラブライフの一部に成り得る。運営に携わる会員は、諸資源の調達やプログラムの企画・運営等、インプットの経験もしており、こうした経験は「創る・支える」という観点におけるクラブライフといえる。なお、サービスの消費者として見做されがちな一般会員も、実は練習の準備やイベントの手伝いといったかたちでサービス生産（運営）に携わることがあるため、生産／消費という関わり方については運営者と非運営者という属性で一括りにして語ることはできない。すなわち、運営者と非運営者の双方においてインプットに関する取り組みへ関与している可能性があるといえる。こうした実態を踏まえ、本研究では、生産活動（運営）にも関わる人を含む「会員」がクラブライフを通じて獲得するアウトカムを網羅することを目指す。

注6) アウトカムをカテゴリーごとに分類したとき、カテゴリー内でさらに下位のカテゴリーが生成されることが予想される。例えば、後述するように「体力・健康」というカテゴリーを設定したが、運動能力が向上したという身体的な健康と、気晴らしになるという精神的な健康を単一のカテゴリーで括りひとつのアウトカム項目とすることは、会員が獲得するアウトカムを正確かつ詳細に捉えることを妨げる。よって、カテゴリー内でさらにいくつかの下位カテゴリーを生成することが求められる。本研究では、それを「サブカテゴリー」と呼ぶ。

注7) なぜなら、クラブライフ経験を通じて獲得されるアウトカムの具体的内実を解明するためには、そのアウトカムを生み出す起因となるクラブライフの範囲を明確にする必要があり、それを怠れば「クラブライフ

経験のアウトカムとは全く関係のない何か」まで捕捉してしまう危険性が存するからである。

注8) スポーツクラブ以外にも、社交・親睦を目的としたクラブやスポーツ以外の文化的活動を目的としたクラブが存在する。本来ならば、それらクラブを含め、クラブライフ概念を検討し、そこからスポーツクラブのクラブライフ概念の規定を行う必要があるが、本稿ではそれは行わない。よって、本稿でいうクラブはスポーツクラブをさす。

注9) ここでいう「コートの外」にはスポーツ生活が一部含まれている。それはスポーツ生活における生産過程である。そのため、「コートの外」とスポーツ生活以外の生活の空間には若干の差異が存在する。

注10) 佐藤（2015）は「良い事後解釈」の条件として、「①事後解釈であるという点を自覚しているか、②事後解釈であるという事実を読者（口頭発表の場合には聴衆）に対して率直に認めているか、③事後解釈の内容が、社会現象の理解という点で何らかの貢献を果たしているか」を挙げている。本研究では、これらの条件を満たすように配慮した。

また、飽戸（1987）は、事後解釈は、次の調査や実験によって検証されなければならないことを指摘しており、この点については今後の課題とする。

注11) 清水（2008）では、総合型クラブへの加入が契機となって地域内ネットワークを拡大させていることを明らかにした。また行實・中西（2009）は、運営参加の内容が幅広い会員は、運営参加を行っていない会員よりも総合型クラブのソーシャル・キャピタルを醸成・蓄積させやすい会員であることを示唆している。

注12) 調査対象者や一般の方々への伝わりやすい表現にするため、パットナム（2001）のいう「ネットワーク」は「つながり」、「規範」は「ルール」という表記として用いた。

注13) 例えば高野・坂本（2005）では、年齢が

高い、友人交流頻度が高い、社会参加活動に従事しているなどといった属性をもつの方がいきがいを感じやすいことが明らかにされ、いきがいの対象としては趣味やスポーツの活動が高い割合（73.2%）を示していた。

注14) 具体的には、全国の総合型クラブのクラブマネージャーに対する質問紙調査（実施期間：平成26年2～3月、回答数：734クラブ、回収率：29.7%）で、「全体的に会員のスポーツライフやクラブライフの質が向上している」との問いに対して、「全くその通り」「まあその通り」と回答したクラブのことである。なお、この問いは「5. 全くその通り」から「1. 全くそうではない」の五段階で測定した。

注15) より多くの会員の声を集めるためにFGIを基本に設計したが、調査の実現可能性を考慮し、そもそも少数しか在籍していない障害者や運営者については、個人を対象とするDIを採用した。また、小学生（No.1）についてはその保護者を、障害者については所属クラブのマネージャーに調査を行い、当該の対象について情報を得た。

注16) 抽出したクラブは、Dクラブ（詳細は表3参照）、Kクラブ（所在値：栃木県、会員規模：100～199人、設立年：平成22年）、Lクラブ（所在値：神奈川県、会員規模：1500～1799人、設立年：平成18年）である。

注17) 各クラブの事務局に配布してもらったため、正確な配布数を把握することができなく、回収率は算定できない。

注18) 分析方法は、安梅（2001）や松橋ほか（2012）などを参考に設定した。

注19) 実際には、重要アイテムの内容を的確に示した名称への変更や、口述データの解釈の可否など、サブカテゴリー案自体の精度を高めるための検討も同時に行われた。その際には、その場の全員が合意することを重要な基準とし、議論を進めた。

注20) サブカテゴリー案の時点で「つながり」に含まれていたもののうち、「社交性の習

得」（成人）は、「学び」に再編した。

注21) サブカテゴリー案の時点で「信頼」に含まれていたもののうち、「特別扱いしない」（運営者）と「過ごす時間」（運営者）は、「学び」に再編した。

注22) サブカテゴリー案の時点で「ルール」に含まれていたもののうち、「クラブ運営に対する相互扶助が行われる（団体として）」（運営者）は、会員のアウトカムではなく、クラブのアウトカムであると判断したため、サブカテゴリーから削除した。

注23) 「いきがい」に関する共同研究者による協議では、仮説的な定義の曖昧さや、他のアウトカムとの差異（「最終アウトカム」ではないのか）という主張が提起される等、その取り扱いについては多くの時間をかけて検討することになった。最終的には、あるメンバーから、いきがいに分類された重要アイテムの内容は「欲求階層」の考え方と合致する点が多いという視点が示され、この解釈がそれらの重要アイテムを整理するために有効であったため採用した。

注24) 「体力・健康」に含まれていたサブカテゴリー案のうち、円滑なコミュニケーション（子ども）は「つながり」、技術的な向上（成人）、結果や成績の向上（運営者）、良いプレーができてうれしい（成人）、知識の習得（成人）は「スポーツへの関わり」、純粋に“動ける”喜び（障害者）は「いきがい」に、それぞれ再編した。

注25) 調査区分別の分析で「スポーツへの関わり」に含まれていたサブカテゴリー案のうち、スポーツを多世代で行えるようになった（成人）は「つながり」、スポーツへ多様な関わりができるようになった（成人）、支えるようになった（成人）、参加者から運営者へ（運営者）は「ルール」にそれぞれ再編した。また、スポーツサービスの拡大（運営者）については、クラブライフによるアウトカムではなく、クラブによるインプットの拡大であるため、サブカテゴリーから削除した。

注26)「その他」に含まれていたサブカテゴリー案のうち、家族間の相互扶助（成人）、家族への気持ちの変化（成人）、地域の安全（運営者）、同じ想いを共有できて安心（運営者）は「信頼」、クラブ内での役割ができた（成人）、クラブ外での役割ができた（成人）は「ルール」、場や情報の共有（成人）、他者の成長を喜ぶ（成人）、会員からの感謝（運営者）、クラブで認められる（運営者）は「いきがい」、足が速くなる（子ども）、他の活動への活力（運営者）は「健康」、技術・スキルの向上（子ども）、スポーツへの理解（子ども）、スポーツに張り合いや勝負が生まれるようになった（子ども）は「スポーツへの関わり」に、それぞれ再編した。

注27)「クラブライフ」というキーワードについて詳細に検討し、体育・スポーツ経営学の立場からその定義を示すことができたことも、本研究の意義の一つといえよう。

注28) かかる視角は、評価指標を普及し、NPO自身による自己改善を促そうとした非営利組織評価基準検討会（2010）の手法を参考にしている。

注29) そのために、演繹的に設定した仮説について、クラブの当事者の認識について網羅的に収集したデータを根拠に事後解釈をするという手法を採用した。また、地域スポーツに精通する専門家やクラブ経営の実務経験者で構成する共同研究グループを組織化し、全プロセスにおいて複数のメンバーでチェックし合いながら進めるよう配慮した。

## 付記

本研究は、日本体育・スポーツ経営学会共同研究プロジェクト『エクセレントクラブ研究』（平成26～28年度）の成果の一部です。ここに記して感謝いたします。

## 文献

- 鮑戸弘(1987)社会調査ハンドブック. 日本経済新聞社, p.120.
- 安梅勅江(2001)ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開—. 医師薬出版株式会社.
- 青木邦男(2014)在宅高齢者の健康関連QOL満足度に及ぼす運動実施状況の影響. 山口県立大学学術情報7:15-29.
- 荒井貞光(2003)クラブ文化が人を育てる—学校・地域を再生するスポーツクラブ論—. 大修館書店.
- 塙佐敏(2011)歩数を基にした子どもの適切な身体活動量の検討—可変要因（運動習慣、生活習慣）や不変要因（季節）と歩数との関連から—. 発育発達研究54:1-10.
- 非営利組織評価基準検討委員会(2010)「エクセレントNPO」とは何か—強い市民社会への「良循環」をつくり出す—. 認定NPO法人言論NPO.
- 伊熊克己・鈴木一央・長屋昭義・石本詔男・秋野禎見(2006)高齢者のスポーツ活動と健康・生きがいに関する研究—北海道K市の老人クラブ会員を事例として—. 運動とスポーツの科学(12)1:87-99.
- 金崎良三(2000)生涯スポーツの理論. 不昧堂出版, p.153.
- 熊谷賢哉(2006)総合型地域スポーツクラブへの参加が地域住民の健康に及ぼす影響について. 長崎国際大学論叢6:9-16.
- 松橋崇史・玉村雅敏・岩月基洋・小西宏(2012)スポーツの社会的価値マネジメントを支援する評価手法の研究開発—日本ラグビーにおける実践研究—. スポーツ産業学研究22(1):117-130.
- 松永敬子(2002)クラブハウスを確保することの意味. 日本体育・スポーツ経営学会編 テキスト 総合型地域スポーツクラブ 増補版. 大修館書店, p.126.
- マートン, R.K.: 森東吾ほか訳(1961)社会理論と社会構造. みすず書房.

- 宮下和・本山貢・木場田昌宜(2010)小学生の生活習慣が体力に及ぼす影響について. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要20: 125-131.
- 中野貴博・春日晃章・村瀬智彦(2010)生活習慣および体力の関係を考慮した幼児における適切な身体活動量の検討. 発育発達研究46: 49-58.
- 内閣府国民生活局編(2003)ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて—. 独立行政法人国立印刷局, p.46.
- 中西純司(2012)スポーツ政策とスポーツ経営学. 体育・スポーツ経営学研究26: 3-15.
- 日本体育協会(2015)持続的な総合型地域スポーツクラブを目指して.
- 岡本秀明(2008)高齢者の生きがい感に関連する要因—大阪市A区在住高齢者の調査から—. 和洋女子大学紀要 家政系編48: 111-125.
- パットナム, R.D.: 河田潤一訳(2001)哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造. NTT出版株式会社.
- 蘇珍伊・林暁淵・安壽山・岡田進一・白澤政和(2004)大都市に居住している在宅高齢者の生きがい感に関連する要因. 厚生学の指標51(13): 1-6.
- 作野誠一(2007)地域スポーツ経営研究の課題—環境認識から環境醸成へ—. 体育・スポーツ経営学研究21(1): 27-32.
- 佐々木玲子・石沢順子・楠原慶子・奥山静代(2013)運動様式の違いからみた幼児の日常身体活動量と基本的運動能力との関係. 体育研究所紀要52(1): 1-10.
- 佐藤郁哉(2015)社会調査の考え方 [上]. 東京大学出版会, p.145.
- 清水紀宏(2001)スポーツ生活とスポーツ経営体に関する基礎的考察—スポーツ生活経営論序説—. 体育・スポーツ経営学研究16(1): 13-27.
- 清水紀宏(2008)総合型地域スポーツクラブの成果を検証する. 柳沢和雄・向陽スポーツ文化クラブ編 総合型地域スポーツの発展と展望—KSCC30年の軌跡—. 不昧堂出版, p.142-143.
- 清水紀宏・柳沢和雄(2015)地域スポーツクラブの成長性分析と経営指標の開発. 筑波大学体育系紀要38: 111-116.
- 鈴木裕子(2001)4歳女児における身体活動と運動能力に関する研究—ライフコーダを用いた身体活動量の測定評価から—. 名古屋柳城短期大学紀要23: 97-107.
- 高野和良・坂本俊彦(2005)高齢者における社会参加と生きがい—生涯現役社会づくり県民意識調査データから—. 山口県立大学大学院論集6: 89-99.
- 玉村雅敏(2003)New Public Managementにおける多元的公共サービス供給システムの構築—青森県「政策マーケティング」の実践—. 公共選択の研究41: 24-40.
- 田中沙織(2009)幼児の運動能力と身体活動における関連について—5歳児の1日の生活からみた身体活動量を中心として—. 保育学研究47(2): 8-16.
- ヴォーン, S.・シユーム, J.S.・シナグブ, J.: 井下理監訳(1999)グループ・インタビューの技法. 慶應義塾大学出版会.
- 柳沢和雄(2002)総合型地域スポーツクラブの実像と虚像. 日本体育・スポーツ経営学会編テキスト 総合型地域スポーツクラブ 増補版. 大修館書店, p.22.
- 行實鉄平・中西純司(2009)総合型地域スポーツクラブ会員の運営参加とソーシャル・キャピタルの関連性. 九州体育・スポーツ学研究24(1): 1-14.

(2016年12月6日受付)  
(2017年3月23日受理)